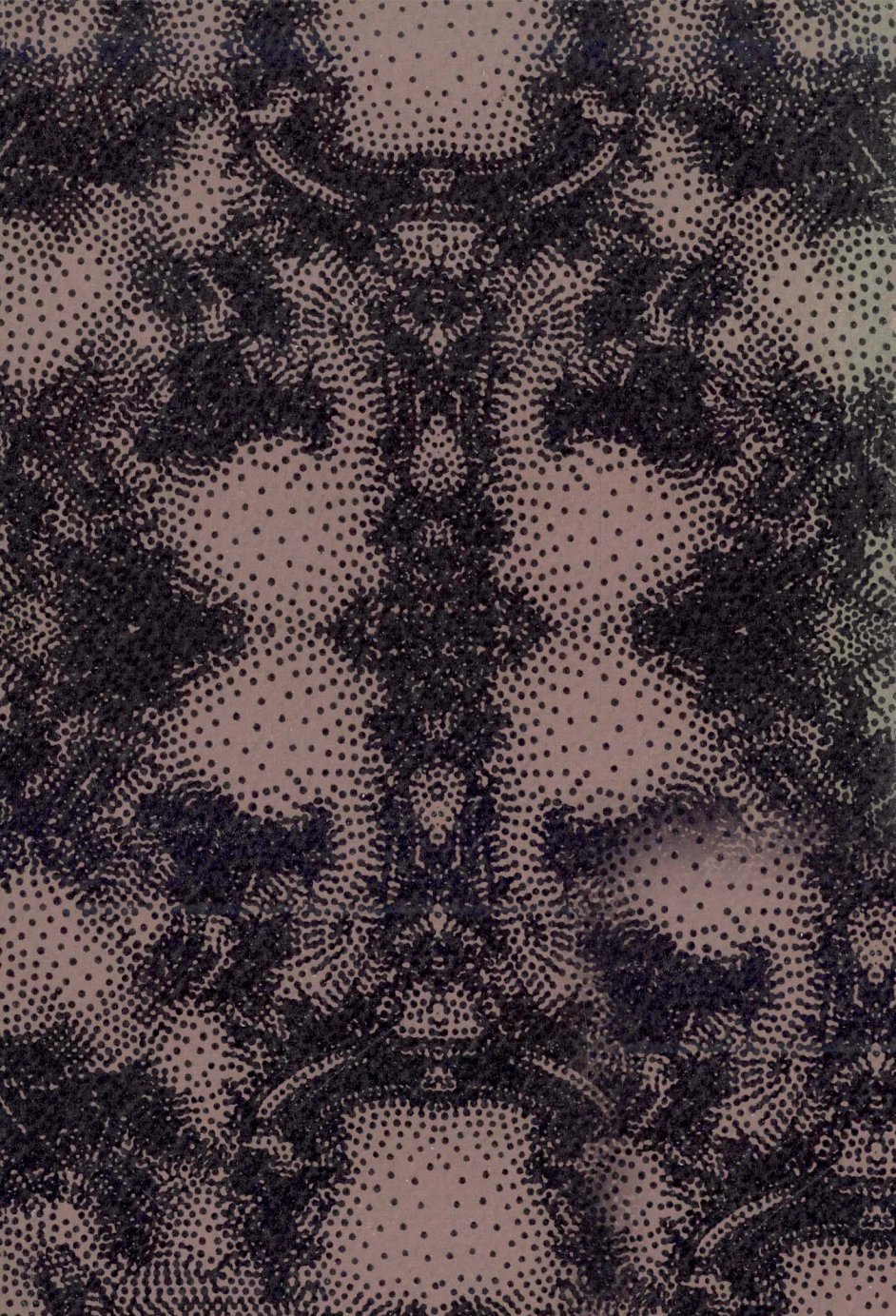




新銳作家叢書

田久保英夫集

解禁

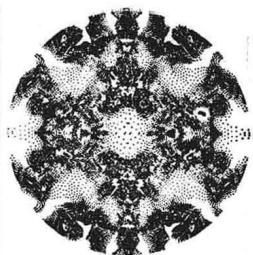
奢りの春

深い河

遅い夏から

茜の空

河出書房新社



新銳作家叢書——田久保英夫集 ©1972

初版印刷——昭和四七年四月二五日 初版発行——昭和四七年四月二八日

定価——六八〇円 装本——杉浦康平＋中垣信夫＋海保透 Carpenter Center for the Visual Arts : Cambridge U.S.A.

発行者——中島隆之 発行所——株式会社河出書房新社 東京都千代田区神田小川町三六 電話東京三二一七二(代) 振替東京二〇〇三

本文印刷——暁印刷株式会社 製本——中西製本印刷株式会社

乱丁・落丁本はおとりかえいたします 0383-534111-0861

解禁…… 5

奢りの春…… 59

深い河…… 111

遠い夏から…… 157

茜の空…… 169

不可視なものへの試み…… 198

田久保英夫と「見る」こと大岡信…… 208

年譜…… 220

新銳作家叢書

——田久保英夫集

解
禁

《娼婦》。いつも手に縋帯をしていて、その傷口が膿んでゐる美貌の《娼婦》。自分の体を船に見立てて、男たちに轟沈させてくれと頼む四十女の《娼婦》。それらがあの戦争という腐蝕剤で錆びついた光線、ふるびた家の湿った黴のような匂いとともに、今でも眼に蘇る。

けれどもこうした知識は、当時の僕の年齢にしては、異常なことだったにちがいない。僕自身もそれに気づかないわけにいかなかったし、まして周囲の人びとから見れば困ったことだったろう。実際あとで聞いたことだが、僕が小学校へ入る時分から、僕のこうした忌わしい世界への接近は、父兄の間で非難されたそうだが、かと言ってどうしようがあるだろう。僕がそういう環境に置かれたことは、僕のせいだろうか。もし僕自身、自分の手で自分の生きる時代や環境を選べるものなら、けっしてこんな環境を、ことに《戦争》のような不都合で、異常な時代を選びはしないだろう。

しかし母は、子供たちをこの環境の特殊さから、つとめて遠ざけようとはしたのだ。子供たちというのは、僕と、四つ歳上の兄だった。母は僕らを離れに住ませ、母屋と離れの間を板塀で仕切ってしまった。そして僕らの面倒を、なが年家にいるたかという中年の家政婦に任せ、離れでほとんど独立した暮しを営ませた。母は時おり離れへ来

たが、僕らはよくよくのことがない限り母屋へ行くことを禁じられた。この禁忌はかなり長い間続いた。

僕は母のこうした厳格さを、訝しく思うことがある。それは父のない家庭の当然の厳格さかも知れないが、母の僕らへの教育には、この形式的な厳格さと、放任主義とが交りあっていて僕らを当惑させるのだ。板塀のむこうで、僕らをなが年たかに任せきりにするというのは、一種の放任ではなからうか。また後年、やむをえない事情によるとは言え、僕が母屋に起居するのをあつさり許してその生活に格別干渉もしなかったことや、兄が中学五年の時、商船学校への入学準備という理由で、大した動揺もなく彼を大阪の遠縁へ送ったことも、僕には解せないことである。僕は母を愛している。また母も僕らを愛してくれたと信じるし、物質的にもその時代の許せる限り、何一つ不自由を与えなかった。にも拘らず、僕は何か欠乏を感じていたのだ。それは僕らの頭や項におかれる掌の温みのようなもの、そうして伝わってくる母親の体温のようなものだ。僕は一度母屋の女中たちが、母と僕らの年齢の隔たりについて話しているのを聞いたことがある。母はその頃、すでに六十に手が届いていた。僕はこの時十二だったから、かなり遅い、不自然な子持だというのである。とすると、僕らには母ではない、別の《母》がいて、生れおちるとすぐ何かの事情で、母の籍へ入籍したとでも言うのだろうか、だ

三千代は、鋭利なカミソリでさつと肉をひと削ぎしたような、鮮かな一重瞼をしている。上瞼から下瞼へ、ほとんど垂直に伸びている濃い睫。それに蔽われた、もの憂そうにゆっくり動く黒い眼。これが彼女の顔で、ただ一つ美しいところだろう。けれども僕は、彼女が着飾って、きちんと膝に手をおいて坐り、どこかとり澄ました所在なさで、放心しているのを見るのが好きだ。彼女はよく、こういう放心をする。絹の上等な化粧着、厚地の織帯。この衣裳が体に重すぎるといふように、彼女の襟はいつも少しはだけている。そこからのぞいているのは、白いがかかなり木目の荒れた肌なのだ。僕の眼には、それらが何となく不調和な豪華さのようなものに映る。そして彼女自身放心しながらも、この効果を心得たように落着きはらっているのだ。女は着飾っていると、どうして演技者じみなのか。それは彼女の職業的習性のせいだ。三千代は《娼婦》なのだ。

7

僕が彼女に会ったのは、戦争の末期で、僕はまだ子供だった。いや正確には、子供のくせに、背丈だけが大人に近づいている年頃だった。戦争はちょうど傾いた太陽のように、為体の知れない終末にむかって急ぎながら、あらゆるものに顔魔の影を浴びせていたが、彼女たちの職業もこのために、本来の派手やかな粉飾を失って、その娼婦性の性根をむき出しにされてしまった。彼女たちは以前、《妓女》或は GEIGY (僕がローマ字で書くのは、この言葉のもつ、ある特定の日本的な情緒や外観を、喚び覚ましたくないからだ。この物語には、それが余計であるばかりでなく、邪魔になりさえする) と呼ばれていたが、その頃では《接客婦》という滑稽な名前に変わっていた。

三千代ばかりではない、僕はいろいろな《娼婦》を知っている。十五六の癖に、痩せてひどく分別くさい顔をした

かったが、この死人以上に、寝ている人間は僕を怖がらせた。

昼間、兄と僕が母屋へ行くのは、たいいてい女中たちが掃除をすます午後だった。ときに意地の悪い女中が、僕らを見つけると、

「まあ、お兄さんたち、そんなに走らないで。お母さんに言いつけますよ。」と言う。

しかし僕らはかまわず、黒々とよく磨かれた階段を踏んで、二階へかけ上るのだ。二階へは表と裏と、二つの階段が通じている。その踏板のジグザグのように、母屋の幅広の廊下や階段には、いつも沈鬱なジグザグな光線が射している。僕らは掃除の後の、誰もいない二階なら、かなり自由に振舞えた。しかしふだん惹かれていた母屋も、いざ来てみると、僕らのすることはたかが知れているのだ。母の潔癖で、いつもきびしく掃き清められた部屋。疵一つない、手入れの行きとどいた壁や重いふすま。古風な家にふさわしい調度。床に下った高価な絵。こうした眼にみえない秩序が、僕らを縛りつけるのか、僕らはまるで博物館にきたように、九つある部屋を一つ一つのぞいて廻るだけなのだ。

それにあきると、物干台へ出てみる。この眺望は、家の中にくらべて僕らを開放的にした。いつも住んでいる離れの屋根が、足もとに見える。庭の棕櫚竹の葉ごしに、僕

の家と同業の、僕の家よりも古い隣家が、明治以来の煤けた鬼瓦を空へ突きだしている。その軒廂と、離れの屋根の間にひろがる空間は、東京下町の空、遠く環状線の土手を走る電車の屋根や、その背後に高台の樹々をのぞむ街並なのだ。僕らはやがて、この眺めにも堪能すると、物干台からまっすぐ庭へ通じる木の梯子を下りて、離れへ戻っていく。

一度こんなことがあった。

ちょうど僕と同一歳の、たかの娘が遊びにきた時で、僕ら三人はその二階で隠れん坊をした。兄が鬼で、僕と女の子が隠れる方だった。僕はひとり、奥まった十畳の屏風の蔭にかくれた。ところがいくら待っても、鬼が一向やつてこないのだ。耳を澄ましても、廊下を歩いている気配がない。僕はそのうち、あたりの静寂や、部屋 of 煙んだ調度や、香華に似たたたみ匂いのなかに、一人でいるのがたえられなくなって廊下へ出た。すると、廊下の隅にたかの娘が、僕と同じような怯えにかられたらしい半べそで、つつ立っていた。

僕ら二人は、反対に兄を探しはじめた。

三つばかり、部屋をのぞいて歩いた時、女の子は僕の耳もとで小声で言った。

「お道具部屋かも知れないわ。」

《お道具部屋》とは、ふとんとか火鉢とか卓子とか軸物と

が僕は今に到るまで、母からは勿論、誰の口からもそんなことを聞いたことはない。しかしかなり早い時期から、これがありそうなことだと考えはじめていた。僕はよく、母ではない《母》を夢想した。

母の禁忌は、僕らの母屋への好奇心をかえって掻きたてた結果になった。ちょうど夏、海岸で波打際へ行ってはいけなと言われると、殊さらその波の冷たいしびきや、海水の分厚いうねりに近づいてみたくなるように。小学校二三年の頃、僕はまだこの家の特殊さを他の家庭と比較して自覚できはしなかったが、そこにある一種秘密めいた、湿润な匂いは嗅ぎあてていた。この匂いは、家の塀沿いの路地、そして路地につづく路地にもあった。僕の家と似たような構えの家、似たような大きな家が並ぶこの一劃の道には、真昼の短い影が、いつも重なり合うように落ちていて、頭上の軒の、鋭い刃物のように光るトタン樋のむこうに、空が細い帯のように見えるのだ。路地の石だたみは、一年中乾いたことがない。その石だたみを、ときに窮屈そうに着飾った《妓》が足速に通る。僕は母屋が、こうした《妓》たちや、客と呼ばれる男たちが出入りする場所であることを知っていた。

一時期、僕と兄は母の留守をねらって、母屋に入りこむことに熱中した。夜は母屋にとって、満潮のようににぎわう時間で、母が留守ということはないから、僕らが出かけ

るのは朝や昼に限られていた。僕は思い出すことができ。朝——といっても夜遅い母屋では、午頃までが朝だから——裏玄関の戸を明けた時の、あの家の奥の匂い、柔かくうれ崩れた無花果のような匂い。それはおびただしい多様な女下駄の脱ぎすてられた土間のむこう、調理場やまだ寝静まった部屋部屋から漂ってくるのだ。調理場には、窓の網戸ごしの白っぽい光線のなかに、うっすらと埃を被って、昨夜の饗宴の残骸、さまざまの料理の残りや容器が放りだされている。皿のうえて萎びたバセリ。食いちぎった厚い肉。折れた箸。瓶子。コップ。色の変った肉の上では、銀蠅が、まるで僕に大人の油っこい歓楽の厚みや、その時過ぎた空ろさを教えるように、鈍い羽音を立てて舞っている。僕はひっそりと薄暗い廊下を、蹙音を忍ばせて歩いてみる。《控間》と呼ばれる玄関わきの母のいる部屋。女中部屋。浴室。そして僕は廊下を曲った彼方、階段を昇った上の部屋部屋に、あの沢山の女下駄の主や、見知らない男たちが眠っていることを知っていたが、そこまで行かずにひき返してくる。闇の中に微かに昼の光がただよう廊下の静寂が、僕を怖れさせた。僕はそのむこうの官能の匂い、大人たちの爛熟した性の影に気づいていただろうか。いや僕はただ、岩間の洞穴の入口から蠱惑的な暗がりのをのぞきこんだような気持だったのだ。その上寝入っている人間を、僕は好きでなかった。僕はまだ死人を見たことがな

戦争の開始は、僕の眼に景気のいい火山の噴火のように見えた。壮麗といってもよかった。小学校五年の僕は、その噴火を——遠い洋上や、南方の地域で行われる戦闘を、實際眼で見たわけではないのに、ほとんど肉感的に感じとっていた。《戦争》という巨大な伐採機の尖った刃のきらめきや、その火花や殺傷を僕は愛してさえた。そうして無責任な物見高さのなかにいて、この代償に《欲しがらないこと》忍耐することを学んだ。

しかし僕らの生活は変わりつつあった。噴火は眼に直接見えないが、その灰は確実に僕らの上へ降ってきた。僕らの好きな菓子や果物も、もう気ままに口へ入らなくなった。僕らはよく学校で、出征軍人を送る旗をつくった。そして教師に賞められる行為と、そうでない行為とがはっきり区別できたので、容易に偽善者になれた。日常の物資に《規格品》や《統制品》があるように、僕らの人格や未来にもそれがあって、僕らを支配していた。僕はこれを信じていた。僕の未熟な想像力は、自分にあたえられた時代や境遇を超えることができなかったように、あたえられた未来も超えることができなかった。僕は《戦争》を、自分の種子の蒔かれた人生の原野を信じた。

兄が大阪の遠縁へ送られることになったのは、僕が中学へ入った年の夏のことだ。彼がなぜ家を去るのか、正確な

事情を僕は知らない。あるいは兄が、年齢的に青年に近づこうとしていて、家の環境に微妙な反応を示すようになったからだろうか。僕はただ、突然こう決った時の彼が、ひどく元気を失ったことだけを覚えていた。

七月のある朝、僕は兄を、環状線の駅のホームで見送った。まだ暑気を含まない、冷たい棘のような陽の射す早朝だった。東京駅で先方の迎えの人と落ち合うために、兄には母とたかが付添っていたが、僕だけは学校があるので、ホームで兄を見送り、東京駅とは逆方向の電車にのることになった。いつも登校する時刻よりは少し早く、両側に街を見下す破れたスレート屋根のホームには、日射しと埃と、そろそろ混みはじめた通勤客がみちていた。

兄は白いピケ帽と開襟シャツに、大きなトラנקを一つ提げ、これから避暑へでも行くようだった。しかし僕らの間には、これから行く世界と、残る世界の大きな隔たりのようなものがすでに浸し始めていて、お互に口数が少く、ぎこちなかった。

「じゃあ。」兄は東京方向の電車が、高架のカアウを緩く傾斜して近づいてくるのを見ると、生真面目な顔で僕を振りかえり、以前自分が誰かに言われたようなことを言った。「体に気をつけて、よく勉強するんだよ。」

電車が停ると、彼の姿は乗客の肩に吞まれて見えなくなったが、すぐ締ったガラス扉のむこうに、家畜の背をすり

か、さまざまな小道具を収めておく六疊ばかりの部屋だ。

南面の廊下のガラス戸に向いていて、日差しがじかに射しこむせいか、抜け場のない空気がむっと蒸れた匂いを放って、長くいると船酔いのような気分になる。

僕がこの部屋のまえに立って、障子をあけると、すぐなかに坐っている兄の姿が見えた。彼は壁際の棚の下に、いくつも並んだ行燈形のスタンドの前で、右手に何かをかざして眺めているところだったが、あわてて手を後へかくすと、上気した顔をしかめて僕をみつめた。

兄はその頃中学の一年だった。彼はひ弱な僕とちがつて、骨格も太く、皮膚の色も浅ぐろかったが、背は僕とほとんど同じ位しかなかった。しかし性質は僕より気短かで、積極的で、ときに癡猛なことすらあった。

僕がこの時見たのは、この癡猛ともいえる、赤らんだ熱っぽい顔なのだ。

「何してたの？」たかの娘が僕のうしろで訊くと、彼は手を背中へまわしたままにやにやと笑った。

「何？ 何なの。」僕は彼のまえの行燈の台についた小引出しが、開いたままになっているのを眼にとめながら言った。

兄はまだ、どこか大人びた奇妙な笑いを浮かべていたが、やがて仕方なく、

「ほら。」と僕の眼のまえに手を突きだした。

彼の掌の先にあるものを、僕は一瞬小さな人形と見誤った。が、よく見るとそれは、二本揃えて立てた彼の中指と人差指に、薄いゴムの膜が嵌められているに過ぎないのだ。兄は僕と女の子に交互に見せると、指からそれをぬいて僕の前に抛り出した。

「ゴムだよ。ゴム。」彼は、またひろい上げて、両手で長くひき伸ばした。

「ゴムだよ。銀貨提げるのにいいよ。お前に上げるよ。」僕はその柔かな、ぶよぶよと締りのない品物が気味悪かったが、手にとってみると、いかにもそれはただのゴムで、消しゴムとはちがったいい匂いがした。触った指に銀色の細かな粉がついてきた。

「欲しけりやまだあるよ、ここに。」兄は立上って出ていこうとしながら、棚の下に並んだ行燈の引出しを指して言った。僕がこの一つを明けると、真新しく、きちんと巻かれたゴム製品が、女の横顔の黒いシルエットの浮き出た小さな袋に入っていた。

僕は兄が置いていったそれを、ポケットにしまった。僕はその頃、支那の古い銀貨を三枚持っていて、これを入れてつり提げるものを物色していたところだった。しかし僕自身、ゴムをこの用途に使わないうちにたかに見つかつて、たちまち取上げられた。たかは母に告げた。

僕は母からひどく擲られた。

た。巢、巢。僕はこの言葉を、衝撃のようにくり返した。巢、何の巢だろう。すると僕のなかに、この半ば以上すでに解けている疑問に応えるように、《巢》に関するいろいろの語彙がとび出してきた。蜂の《巢》。蜘蛛の《巢》。塵芥の《巢》。黴菌の《巢》。汚穢の《巢》。悪臭の《巢》。悪の《巢》。そうしてこれらと、今西がいった《時局》という言葉とが、まるで二つの背反する音楽の主題のように、耳の奥に鳴りひびいた。僕は電車の窓の遠くから、今西や彼の父の眼を借りて、自分の家を眺めた。気づいてみると、今までこうした他人の眼で、あの家をおく眺めることができなかったのがひどく迂闊なことに思われた。僕の顔には、初めて自分の体の臭いや、醜悪さに気づいた時のように、血が昇ってきた。そしてやっと、兄が大阪へ送られた理由に納得がいった。それは彼の意志でなかったかも知れない。だが今では僕には、兄があの家から自由になって飛びさって行ったように思えた。残されたのは、自分一人だ。こう思うと、突然その電車の噪音と、朝の車内の人いざれのなかに、心の襲のほっそりと尖った裂け目のような孤独が、僕を取りまいてきた。……

僕は自分のなかで、何が起っているのかよく知らなかった。兄が去ると母屋へも行かず、しだいに軍事教練や勤労作業の多くなる学校へ、せっせと通った。ときどき僕を見

まってくるのは、あの母ではない《母》への夢想。それから自分の内部で齟齬がいたむような疼き。これら多分、少年期の感傷にすぎないもの……。そしてあの今西の言う《時局》と《巢》とが、ちょうど間歇泉のように時をおいて、重い響きをたてた。僕は《戦争》を信じ、また愛してさえたから、自分の家にある反社会的な陰影に悩まされた。家から一步でた外の社会では、《戦争》という超越的な目標が、さんさんと輝き、人びとにあらゆる禁制や禁欲主義を課していた。しかし家へ帰れば、その場所は、こうした禁制や禁欲を破るためにだけ存在しているのだ。この暗がりでは人間が、社会の監視をかすめ、ときにその呪詛さえ浴びながらくらしている。僕はこの自分に投げかけられた素朴な命題が、ある時期に誰でも、形こそ変れ襲われる背反だということを知らなかった。そしてこういう時期に、人間はある運命——社会の陽の当る側から顔をそむけ、進んで自分を反社会的な暗闇に追いやるような、無頼者の、犯罪者の、稀には芸術家の、運命をえらび取りかねないのだということも。

僕は兄と同じように、家を出て行きたい気がした。しかし僕には兄とちがって、誰も引き取りにきてくれそうもなかった。その代り僕は、級友に対して、母屋に対して、《戦争》に対して、幾分よそよそしさを感じ出した。そして自分の外面とは、時と場合によって使いわけられる、便

抜けて跳び出した兎のように、白いピケ帽が現われた。彼はガラスを指先で叩いた。その顔はちよつと頤を突き出し、にこりともせず僕をみつめていた。ホオムを横切つて射しこむ陽がガラス扉を黄色く縁どり、その反射とともに兄の姿は一揺れした。そしてたちまち眼の前を流れさつた。

電車の後尾が視界から消えた時、僕は急にうしろから肩をたたかれた。

「どこへ行ったの？」

みると背後に、今年同じ小学校から、同じ中学へ入った今西という級友が立っていた。彼と僕とは去年まで級がちがつていて、彼は別の組の級長だった。父親が区役所の厚生課長だという今西は、薄い眉をいつも利口そうに寄せ、青白い勿体ぶつた顔をしていた。僕はその級長然とした様子があまり好きではなかったが、同じ中学へ入った二人だけの仲間であつてみれば、近づかないわけにもいかないのだ。

「どこへ行ったの、兄さん。」

僕は商船学校へ行く準備のために、親戚へ預けられたのだと話した。

「それがいいね。」今西はふいに、やや近視の細めた眼を傾かせて言った。僕はこの断定的な口調に、おもわず彼をみつめた。

「どうして。」

「だって、それがいいよ。」彼は落着いた声で言った。「君の家よりは、親戚へ行った方がいいよ。」

「どうして。」僕はまだわからずに訊いた。

「だって、君の家は未成年にはよくないよ。それにこの時局だろう。」

「時局。」

折から電車がきた。僕は今西とともに車内に乗りこみながら、やつと相手のいう意味がわかりかけた。

「僕の父だって言ってるよ、君の家は——。」扉に凭れている僕の眼のまえで、今西は口ごもった。

「僕の家は、何？」僕はある予感とともに相手に訊いた。「父がね。」彼はそう言つたきりまた言葉を切つたが、僕にみつめられると、

「……の巣だって。」

「巣？」相手の口のなかで消えた言葉を、僕は確かめた。

「何の巣？」

だが今西は、もはや答えずに、扉のガラスの外へ眼をむけた。

電車は高架のカアヴにさしかかり、むこうで煙突や、小学校の鉄筋校舎や、銀行の看板がゆっくり廻っていた。その廻転の中心あたり、朝の光がようやく熱気をふり注ぎはじめた屋根のむこうに、あの路地や僕の家がある筈だつ

てるんだ。君もすぐ、これがやりきれなくなるよ。」

乾いたくろい皮膚に、肉のおちた大きな眼を持ったその顔の主が、僕には一体青年なのか、少年なのか見当がつかねた。少くとも兄よりは歳上だろう。椅子からつき出した脚が長く、湯上りタオルの下腹が、息するたびに大きく膨れたり縮んだりした。

「二年も。」僕は訊いた。「どこが悪いんですか。」

「君と同じだよ。ここの病棟の患者はみんな結核だよ。」

彼はタオルに顔をうずめ、蒸れたような声を出した。「でも君が、もし癒りたい人だったら、この病院は考え直した方がいいよ。ここの医者、結核患者があまり得意じゃないんだ。ほんとだよ。現に君の部屋のベッドだって、この間一人死んだばかりだし。」

僕は背中に不快なものを押しあてられた気がした。

彼は氣むずかしそうに眉をよせ、しばらく試すような視線で僕をじろじろと見まわしたが、

「君。」ふいにまた噎れた声を出した。「トルチェルロって知ってる？」

「トルチェルロ？」僕は戸惑って言った。「知らない。」

「じゃ、顔真卿は？」

「いや。」

「ジュウル・ラフォオルグは？」

僕は首を振った。

解禁

「だめだなあ。君はここへ来るまで何してたの？ 学校へ行ってなかったの？」

「でも戦争が——」

「戦争？ ふん。」彼はいかにも軽蔑したように、唇を歪めると黙りこんだ。僕はその憎々しげに嚙んだ口もとをみた時、初めて相手が一見したよりずっと歳若な、少年なのをさとした。肉の剥げた、褐色のしみの浮き出た頬のあたりには、育ちのいい、甘ったれた子供の癪癪さを感じられた。彼はもはや僕と口をきく気がしないのか、それとも疲れたのか、椅子の背に不行儀に顔をうずめ、眼をかく閉じたきりになった。

その朝、僕はひどく惨めな気持でベッドへ戻った。相手の銜学で、僕の誇りが傷つけられたばかりではない、自分が病気を甘く見すぎているのではないかという、不安が起ってきたからだ。僕は鉄枠のベッドの、真中の窪みに体を入れると、否応なくここで死んだという前の住人を思い出した。その窪みは人間の体の凹凸を残して、僕の背中にびったりはりつき、まるで次々この部屋を訪れる病人によって刻まれた、冷たい死の鋳型のようなだった。僕はこういう暗示を与えたあの少年に、腹を立てた。

看護婦が体温を計りにきた時、僕はこの話を彼女に詮した。

「まあ宮内君が、そんなことを言ってる？」小柄で、腋臭の